
自然を教えてくれた場所

空風灰戸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自然を教えてくれた場所

【Zマーク】

Z6084E

【作者名】

空風灰戸

【あらすじ】

深夜の高層ビルの頂上に男が立っていた。男は聖なる光に照らし出された夜景をぼんやりと眺めていたが、彼は風を全身に受け、下へ降りていった……。彼のその行動は、彼の幼少期の思い出までさかのぼらなければならなかつた。

その町は深夜にもかかわらず、色とりどりの明かりが灯つたままである。その明かりは、闇の中に綺麗にうつり、闇を照らす聖なる光のようである。その聖なる光は、遠くの山から または、光の中心地から離れたビルの屋上から見た景色を、“夜景”といつ。

とある、高層ビルの頂上に男が立っていた。顔はやせ細り、お世辞でも中背とはいえない体格をしたその男は、さまよい焦点が合わないその視線で、聖なる光に照らし出された夜景をぼんやりと眺めていた。だが、聖なる光は彼を照らしてはくれなかつた。彼を照らす出すものは何一つなかつた。彼は闇の中をさまよつていた。

いつたい自分はどうすればいいのだろうか。その自問に彼はこの答えを出した。靴をそろえ、その靴の上に一通の封筒を置き、ビルの柵を越えて、頂上の端に立つた。時間が一秒一秒過ぎてゆく。彼は、ゆっくりとその視線を前から下へと移していく。

深夜というのに、多くの車が通つている。歩道にも人はいるが、その大半がふらふらと歩く場所がずれていく人ばかり。まっすぐ歩いていく人など少数だ。さらに少数なのは、道端で眠つている人物だ。少なくとも、その場にたたずんでいるものが一人いるのが彼にはわかつた。

私もその中に加わる、と何のためらいも冷静さを欠くことなく彼は思った。

彼は視線を元に戻し、夜景を見る。聖なる光は、やはり彼には照らし出されなかつた。

暗闇。彼は下から上へ吹き抜ける風を全身に受けながら、エレベーターより早いスピードで下へと降りていつた。

さかのぼらなければならぬ。

じきょう

十歳まで自然に囲まれた田舎で育つた火田少年が、突然都会に引越しをしなければならなくなつたときには、喜びと悲しみがあつた。都會といえば、田舎育ちがあこがれる場所である。誰もがあこがれの場所に行くことができるとなれば、喜ぶものだ。しかし、彼は自然を愛す少年だつた。都會といえば、灰色の建物が立ち並び、空気が汚れ、人が多く、縁がないところであるというイメージが強い。いや、実際にそうなのだ。そんなところに火田少年は住みたいとは到底思えなかつた。

そうはいつても、火田少年に都会行きの拒否権はなかつた。都會に出てきたとたん火田少年の都會に対する喜びは、塵となつて消え、一種の大きなカルチャーショックを受けた。

とはいへ、カルチャーショックは次第になおしていくもので、數ヶ月もしてしまえば直つてしまつたが、負つたショックだけはいつもでも彼の心に残つた。

それから数十年たつと、彼は都會の一サラリーマンとなつていた。ごくごく普通の会社で、給料も普通、仕事内容も普通、何もかもが大衆に埋もれてしまう人物であつたが、ひとつだけ彼には大衆から抜き出るものがあつた。

それは、自然に対する心である。

十年ほど住んでいた、あの自然に取り囲まれていた彼の田舎。それは彼の心に深く印象付け、都會に出てきたときのショックもそれを增幅させる役割を持っていた。自然がないと人は心が落ち着かない、それが彼の理念であり、自身が感じたことであつた。

その理念をぶち壊していくのが、近年の環境問題だつた。ゴルフ場はたくさん作られ、森林伐採という伐採による木々の減少。地球温暖化による砂漠化、異常気象……………数え上げればきりがない。

それに心を痛め、対抗したいと考える火田だつたが、仕事が忙しくそれに対抗することはできなかつた。

早すぎる桜の開花の春。新たな新入社員が入ってきて、火田は山

下という女性の研修を担当することとなつた。綺麗とは、特筆してはいえない女性で、肌は浅黒く、火田は彼女がスポーツ万能または、スポーツに熱中していた女性だったということを推測した。彼女の研修期間とのある休憩時間で、火田は、何かスポーツをやつていたのかと彼女に尋ねた。

「いえ、私はこれといったスポーツはやっていませんよ」

予想に反した答えが返つてきたので、火田は驚いてしまつた。その表情が出たのだろうか、彼女は付け加えた。

「私はボランティア活動をしてるんですよ」

「ボランティア活動？」火田は感心したように繰り返した。

「はい。私は環境保護のボランティアをやってるんですよ。ほら、今環境保護が問題になつてゐるじゃないですか。それを防ぐための活動ですよ」

「へえ、そんなボランティアがあつたんだ」またも火田は感心した。「だが、今はやつてないんだろう？」

「やつてますよ。平日はこのとおりなのでいきませんが、土日は休みですから、そのときに」

環境保護のボランティア活動について興味を持つた火田は、彼女にそのことを問い合わせるようにしていった。

一通り、言つた後、彼女は付け加えるようにいつた。

「でも、生命保険に入らないといけないので、お金はもらえないのに払わなければいけないんですよ」

「どうして生命保険なんかに？」

「自然つて何が起くるかわからないものですから。もしものために、というところです。自動車保険みたいなものですよ」

だが、生命保険の話なんて火田は特に気にはかけなかつた。そんなものより、魅力ある、彼の関心をずっと引き続けたものが、その会話中でずつとでてきていたのだから。

とはいひ、保護団体のボランティアに参加するには、生命保険に入らなければいけなかつた。結局、火田は生命保険に加入すること

となつた。

保護団体に入つてからの火田は一変した。会社にいるときは、それまでどおりに仕事をこなし、土日は会社でのストレスを吐き出すように生き生きと、楽しそうに活動をしていた。時には、共に仕事をしている人と環境問題について熱弁したり、田舎のことを話したりしていた。

共に仕事をしている人といえば、彼が保護団体に参加するきっかけを作ってくれた山下と共に活動することが多かつた。それは、紹介主が彼女であつたこともあるし、彼女自身が自らオファーしたというのもあつた。

彼女は、一度火田から「なぜ自分から志願したの?」と聞かれたときにこう答えた。

「会社じゃ私が下ですからね。たまには上にたたせてくださいよ!」
そういう彼女は、どこか何かを引き寄せる魅力を秘めていた。そして、本当にそうなのかと火田は疑問を抱いた。

「久しぶりだなあ!」

思わず火田は歓喜の声を上げた。見渡すかがぎり、田んぼと畑ばかり。そして、それらの四方八方は山しかないその場所は、彼の田舎だった。

「ここが火田さんの田舎なんですね」山下は言った。
「そうさ。それにしてもここも変わってしまったな……前はもっと緑豊かな場所だったのに」

冬のその寒い年　火田がボランティア活動を始めてから、もう三年過ぎたころ、彼のボランティア団体は、彼の田舎へとやつてきていた。遠い距離なので、その人数は多くないが、現地の同じ趣向の団体と共に活動することとなつていた。

ここ数年この場所では伐採が大きくなされ、場所の一部が著しくはだげてしまつていてるといふ。また、山火事が起こりできたはだけた場所があり、その場所は、遠くから火田のみならずほかの人員も

遠くから確認することができるのは大きなものになっていた。

十年ほど住んでいたこの田舎。それ以来、初めての帰郷は彼の心に重しをかけるところから始まった。

この地での活動は、時間がかかるため、連休中に活動することになっていた。つまり、二泊三日でこの地に滞在し活動することになっている。そのため、本格的な活動は一日目から始めるとして、初日は簡単に作業内容を聞くだけで終わり、残りは自由行動となつた。

火田はもちろん、旧家へと訪れたことにした。それにはどこにも行く当てのない、これといった名産もない場所だから、山下も同行することになった。

旧家はまだ残されていた。誰も住んでいる様子はなく、家はボロボロでいまにも崩れそうながらも今もまだ、立派にたたずんでいた。火田は、中に入り旧家の中の探検を始めた。驚いたことに、彼はまだその家の構造を覚えていた。どこに何があり、大きな部屋だの、小さな部屋だの、倉庫だのすべてだ。とはいって、どの部屋もがらんとしていて、当時の面影はほとんどない。彼の心はただただがっかりするばかりだった。

都会育ちの山下は、ボロボロでも立派にたたずむこの家に感動した。都会ではこんな家はなく、あつてもすぐに取り壊されてしまう。自然の摂理に従つたままたち残る、この家に協賛の言葉を送りたいぐらいだった。

「ねえ、火田さん」その家を出ると、山下は少し緊張した面持ちで言った。「この家いいですね」

「確かに悪い家じゃないよ」火田は意外に思いながらもいった。「ほこりはすごいけど、それを取り除けばまだまだ使えそうだし、部屋もそれぞれ広いしね」

「あの火田さん」少し声が低くなる。間が空いてから続けた。「この家に住みませんか?」

「え?」

唐突なその言葉に、拍子の抜けた声が火田の口から飛び出した。

彼は彼女の顔をじっと見ている。

「それは……」火田の声は続かない。

「いえ、なんでもないです」山下はあわてて否定した。自分のいつた言葉が恥ずかしくなつたからだつた。「気にしないでください。さあ、早く宿に帰りましょうよ」

新しい陽が昇り、なつかしの山に入った火田は複雑な心境だつた。幼いころは、今いる山に登り遊んだものでたくさんの木々に囲まれていた。それが今では、無残にも強い太陽の光を浴びる、ギラギラと輝いていたが、その輝きは火田には強いパワーをあたえることはなかつた。

その現場で、彼は旧友と再会することになった。その旧友は、火田が都会へ出てからずっとこの場所で住んでいたといつ。

「なんといっても、おれのところは有名な農家だからなあ」その旧友は言う。「都會に出て家業を継がないわけにもいかんし、都會に興味もないから別にいいんだがね」

「まあそれのほうがいいさ」と火田。「都會に出てもらくなことはないからな」

「でも、都會はすぐ近くに店があるからいいじゃないか。こっちじや、車を走らせんと買い物なんてできんよ」

「利便性にすぐれてるだけで、物騒などるだし、利便性と比べると損害が大きすぎるよ。それに、こういう自然もないしな」

冬の日の外での作業はつらい。太陽の日があたつているといえど、木々など風をさえぎるものはないし、山の上であるから強い風が彼らを常に襲う。その風に震え上がる人たちのために、風除けのための場　休憩所が設けられており、タイムスケジュールで休みの時間になつている者たちは、そこで休憩をしていた。休憩所では、温かいお茶が地元住民　その中には火田を知っている人が数名いたの人たちの手によつて配られていて、作業をする人たちの体を温めていた。

火田を知つてゐる初老を迎えてゐる地元住民女性に、火田は尋ねた。

「お茶をここで沸かしてて大丈夫なんですか？」

休憩所の風除けの場では、机の上におかれた鍋用コンロでぐつぐつとお茶が沸かれていた。無論、ぐつぐつと沸かれているということは火を使つてゐるということであり、それがなんらかによつて倒されたりすれば、落ち葉に引火し、山火事に発展する可能性があることがあるから、火田はそうなることが不安だつた。

「大丈夫さ、ちゃんと火が引火しないように工夫をしてるし、もしものときのために消火器は、手の届くところにちゃんと用意してあるからね。危ないといつても、これがないとあなたたちは寒くてしょうがないでしよう？」

「まあ確かにそうですが」

「気にしちゃいけんよ。さあさあ、体をあつためて早く仕事をしてくださいよ！」

「そうですよ」

知り合いと話でいるとき、山下が休憩所へとやつてきた。彼女はお茶を受け取ると続けた。

「消火器があそこにあるんですし、大丈夫ですよ。気にすることはありません」

「しかしながら

「それより、後で残つてるほうの作業と一緒にやりませんか？」

数時間の後、作業が終わつた一人はまたこの休憩所でお茶を飲んでいた。先ほどの地元住民女性はいなくなり、中年かそれ以下の女性たちが今度はお茶を沸かしてゐた。

二人は、途中から加わつた火田の旧友を含めた三人とその場で会話を續し、体が温まつてから宿へ帰ろうと考えていた。

「しかし、相変わらずここは寒いところだな」と火田は旧友にいつた。

「本当に相変わらずかよ？ 最近じゃどんどん寒くなる一方さ。昔

よりかは確實に寒くなつてゐる

火田は立ち上がつた。

「お茶のお代わりいります？」火田は山下に尋ねた。

山下は肯定の返事をし、コップを火田に渡し、火田はお代わりをもらひにいった。しかし、そこにいた女性たちは、ほかの人たちのところへいつていたので、彼は沸かしていたものを自身でコップへと注ぎ始めた。

そのとき、強い風が休憩所を襲つた。

風は、風除けを通り越して、机を大きく揺さぶり、その上においてあつた鍋用コンロを机から振り落とした。

火田はその光景をただただ見ているしかなかつた。それは一瞬のことで、彼がそれに気づいたときには時すでに遅し。火は落ちていった落ち葉に引火し、轟々と炎の勢力を強めていった。

火田はあせり、持つていったコップとやかんを投げ捨て、消火器に手を伸ばした。しかし、消火器は発生場所からあまりに近すぎて、手を出したときにはすでに軽く炎の中に入り込んでしまつていた。そのため、手を出せば厚着している服に引火してしまつため、火田はそれを取ることができなかつた。

そのころにはほかの人たちもそのことに気づき、彼の旧友と山下は彼のところへやつてきていた。

「急いで消防車を呼ばないと！」山下は叫ぶ。

「おい、佐藤。こいつをなんとかするぞ」

二人は着ていた服で、炎を消そうと努力を始めるものの、ぬかに釘であつた。消防隊がやつてきたときには、すでに多くの木々に炎が引火し、山火事を引き起こしていた。

幸いにも参加者はみな無事で、誰も逃げ遅れず足をひねつたりするといった怪我人すらもいなかつた。だが、燃えている木々をじつと見てゐる火田だけは、誰にも見えない傷を負つていた。その傷を知つたのは宿舎に帰つてからで、それもわずかの人物しかそれを知らなかつた。

「気にするなよ」旧友は火田を慰めの言葉をかけていた。「あれはお前のせいじゃないんだから」

「そうですよ」と山下。「なにも火田さんが落としたわけじゃないんですよ。あのときあの強風が吹かなければ」

火田は立ち上がった。そして、「ごめん」と一言残し、その場を辞した。

自室に戻った彼は一人罪悪感に苦しんでいた。

環境保護のためにやつてきたのに、その逆をやつてしまった。自然をこよなく愛している彼にはそれは痛ましいことである。それでも、彼はいまのような罪悪感に見舞われるだろう。その罪悪感をさらに増大させているのが、彼の田舎の山であつたということだ。少年期の思い出の地の自然を逆に壊してしまった……。

確かに風のせいといつてしまえばそれまでだろう。だが、よく考えてみるのだ。あのときやかんを自分で取らずに、地元住民の人によつてもらえば、強風が吹いたときにはまだコンロの上にやかんがあり、コンロがひっくり返ることはまずなかつたはずだ。それなのに、重しを取つてしまつた……。

自分がやらなければ　彼は思い悩み、一人苦悩した。

数日後に山火事は消し止められた。山肌のはだけ具合はさらに深刻化し、元に戻すのには相当な時間とお金がかかることになつてしまつた。

そのニュースを聞いてから、火田は一週間の休暇を取つた。そして、苦悩した。顔はやせ細り、体もやせてきた。彼の部屋のカーテンはすべて閉じられていて、日光を一筋すら受け付けなかつた。昼間なのに闇に閉ざされ、その中で苦しみもがき、苦悩することとなつた。

すごい勢いで下から上へ吹き付ける風を全身に受けている火田は目を開けた。暗闇。

これが走馬灯か。

彼が自殺に至るまでの簡単な経緯が、一瞬のうちに彼の脳裏をよぎり、また、すべてを彼は一瞬にして理解した。走馬灯とは不思議な力があるらしい、と彼は感じた。そして、時がゆっくりと流れている気がした。

彼はこの自殺で出る、生命保険の保険金を田舎の山の復旧のために全額寄付すると遺書に記していた。あの事件を冒した罪は一度と戻らない。それなのに、いつまでたっても苦悩しなければならない……そんな日々を迎えるなら、自分が死に山の復旧に役立てよう、そう考えこの結果に至った。

田舎の山……。田舎……。家……。彼の前にそれらが映し出される。

そのとき、声が聞こえた。低い声なので、何をいつてるのか聞き取れない。必死になつて聞く耳を立て、それを聞こうとする。そして、聞こえたのは、「この家に住みませんか?」という言葉だった。山下か、と彼は思った。あのときは何をいつていたかをちゃんと聞き取れなかつたが、彼女はそういうふうにいたのか。

その一言は彼の心を激しく揺さぶつた。この家に住みませんか?この言葉の裏には、大きな大きな意味がこめられている。その意味は彼も持ち合わせていて、共にそれに気づいていなかつた。

美々…………！

そう心中で叫んだとき、彼の目前には地上が迫つっていた。彼は必死になつて体制をかえようとした。頭から地上に落ちるのではなく足から落ちよう、と。だが、それはかなわなかつた……。

そこは純白の部屋だつた。窓からはギラギラと輝く日光が入り込み、室内を照らし出していて、純白をさらに際立たせていた。そして、彼も照らし出していた。

「ここは……」火田はつぶやいた。「病院……？」

そのとき、ドアが開く音がしたので、そちらを振り向くと、そこ

には山下が立っていた。

「火田さん」聞き取れるか取れないか程度の声で山下は言った。「起き上がったんですね」「ここは？」火田は尋ねた。

「病院ですよ」

山下は火田の隣の椅子に座った。

「じゃあ、私は……」

「はい、助かつたんですよ。運がよくて、植え込みの中に落ちたので、無事だつたんです」

体制を立て直そうと努力したのは無意味ではなかつた。体制こそできなかつたが、動いたおかげで植え込みの中に落ちる結果となつたのだから。それに火田が気づいたのはもつと先のことだつたが。「でも……どうしてあんなことを？」その声には悲しみの響きがこもつていた。

「遺書は読みませんでしたか？」逆に尋ねた。

「読みました」

言葉は続かない。火田はいった。

「なら聞くまでもないでしょう。私はあの遺書の目的のために自殺をしました」

「でも、あの事件は事故だつたんです。火田さんがこんなことする必要はなかつたはずです」

「いや、あれは私のせいだつた。私があのやかんをとらなければ

」

「そんなのこじつけです」ひどく口調が高ぶつている。「火田さんはあんなことをする必要はなかつたんです。誰もあんなことをするのは望んでいませんでした。それに私は

ついに山下は泣き出してしまつた。そのとき火田は気づいたことだが、自殺をしたあの日からすでに三日がたつていた。その間、彼女はずつと……。

火田はそつと彼女の肩に手を置いて、じりこつた。

「もう大丈夫。もうあんなことはしないよ。一人での家に住もう
ギラギラと輝く太陽が、一人をキラキラと照らし出している。
少年期の思い出が詰まった地と家で、また、新しい思い出が作ら
れようとしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6084e/>

自然を教えてくれた場所

2010年10月8日15時08分発行